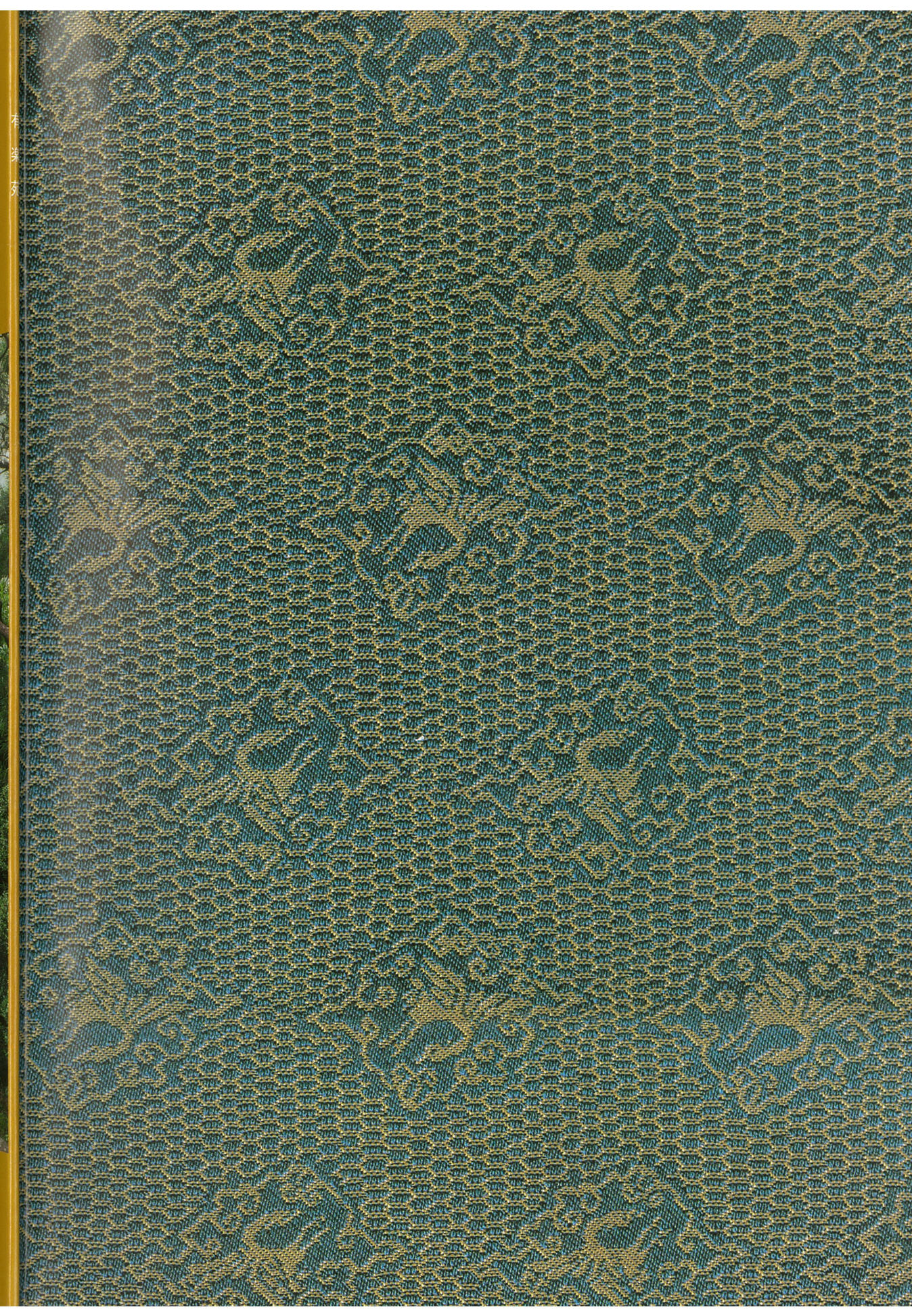


有乐苑



国宝茶室 如庵



目次	
有楽苑	2
織田有楽斎の生涯	2
有楽と茶の湯	4
織田有楽斎書状「残菊の文」	5
有楽苑の開苑まで	6
岩栖門	8
旧正伝院書院(重要文化財)	9
有楽椿・ひとつばた	10
旧正伝院書院南面・内部	12
旧正伝院書院襖絵	16
徳源寺唐門	17
如庵(国宝)	18
如庵平面図	19
如庵全景	20
如庵露地(釜山海・佐女牛井)	22
如庵内部	24
有楽窓・暦	26
嘯月台	28
元庵	29
元庵内部	30
弘庵	34
藤村庸軒旧蔵石燈籠・元庵蹲踞	32
水琴窟	35
弘庵内部	36
茶花園	38
有楽苑の四季	39
茶会・犬山焼	40
有楽苑への道・有楽苑のあゆみ	
表紙 国宝茶室如庵 題字 田山方南	



織田有楽斎(一五四七―一六二二)の生涯

有楽の名は、茶の世界のみならず、東京数寄屋橋に近い地名にも残され、多くの人々に親しまれている。

有楽は織田信秀の十一男で、織田信長の実弟として天文十六年(一五四七)、尾張に生まれ、通称を源五郎、名を長益と言ひ、剃髪してから有楽斎如庵と号した。

天正十年本能寺の変で兄信長が倒れたあと、彼は信長の家臣であった豊臣秀吉の配下となり己の地位を安泰にしたのである。

有楽は秀吉の側室となった淀君にとって叔父にあたり、その後見人として淀城にいたが、関ヶ原の役の後はその功により徳川家康から禄を与えられ、豊臣秀頼の補佐役として大坂城にいた。冬の陣の後、東西の対立が激化すると彼は和平に奔走し一度は成功をみたが、それも不調に終わるや夏の陣を前にして、元和元年(一六一五)大坂を退き京都に隠棲した。

京都では一時二条に住んでいたが、間もなく当時荒廃していた建仁寺塔頭正伝院を再興し、そのなかに自身の隠居所を設けた。それは元和四年(一六一八)の秋には完成していたようである。如庵はそこに造られた茶室であり、書院は有楽が晩年起居した隠居所である。有楽はこの正伝院において、元和七年(一六二二)十二月十三日波乱に富んだ七十五年の生涯を閉じたのであった。苛酷な戦国の世の転変を生き抜きながら、平穏な晩年を過した有楽は幸運であった。彼は貴公子風な人柄と豊かな文化的教養や芸術的天分に恵まれ、その生涯は風流の心に貫かれている。

年譜

年号	年齢	有楽斎の関係事項
天文一六(一五四七)		織田信秀の十一男として出生 名は長益
永禄三(一五六〇)	一四	桶狭間の戦い
天正四(一五七六)	三〇	この頃信長七副将の一人として名あり
天正一〇(一五八二)	三六	本能寺の変
天正一一(一五八三)	三七	津田宗及茶会に秀吉と参席
天正一四(一五八六)	四〇	摂津に二千石の領地を得る
天正一五(一五八七)	四一	北野大茶湯に加わる
天正一八(一五九〇)	四四	この頃、「無楽」から「有楽」と改める
天正一九(一五九二)	四五	利休自刃
文禄元(一五九二)	四六	文禄の役
		秀吉に従い肥前名護屋へ赴く
文禄三(一五九四)	四八	秀吉の前田利家郎来訪に当り、飾付け等すべての指示を行う
慶長五(一六〇〇)	五四	関ヶ原において東軍方として参戦
		功により大和に三万石を得る
慶長六(一六〇一)	五五	居を大坂天満に定める
慶長八(一六〇三)	五七	家康征夷大將軍となる



■織田有楽斎像
(正伝永源院蔵)

慶長一〇(一六〇五)	五九	天満屋敷茶会、神谷宗湛などを招く
慶長一四(一六〇九)	六三	駿府に家康を訪れる
慶長一六(一六一一)	六五	家康と秀頼の会見を斡旋し、両者二条城で会見
慶長一七(一六一二)	六六	天満屋敷茶会、千少庵などを招く
		秀頼天満屋敷を訪れる 玉垣文琳を献上する
慶長一八(一六一三)	六七	天満屋敷茶会、片桐石州などを招く
慶長一九(一六一四)	六八	大坂冬の陣
慶長二〇(一六一五)	六九	大坂城に入る 徳川豊臣の和議成立に尽くす
元和元		大坂城を退去
		大坂夏の陣
		この頃京都二条に居を移す
		所領三万石のうち、四男へ大和戒重、五男へ大和柳本の一万石ずつを分与
		名泉佐女牛井を修復
元和三(一六一七)	七一	正伝院を再興・隠居
元和四(一六一八)	七二	正伝院の一隅に如庵を営む
元和五(一六一九)	七三	伊達政宗を招き茶会を催す
元和七(一六二二)	七五	十二月、没す 法号正伝院殿如庵有楽大居士

国宝の茶室は、如庵のほか、千利休作と伝える妙喜庵の待庵（京都府山崎）、小堀遠州好みの龍光院密庵席（大徳寺）の二つがあるだけで、如庵は名実共に茶道文化史上屈指の存在である。

如庵は柿簀入母屋風（片入母屋造り）の屋根の妻を正面に向け、左方に入り込んだ土間庇を形成し、妻に大晦筆の「如庵」の額が掲げられている。

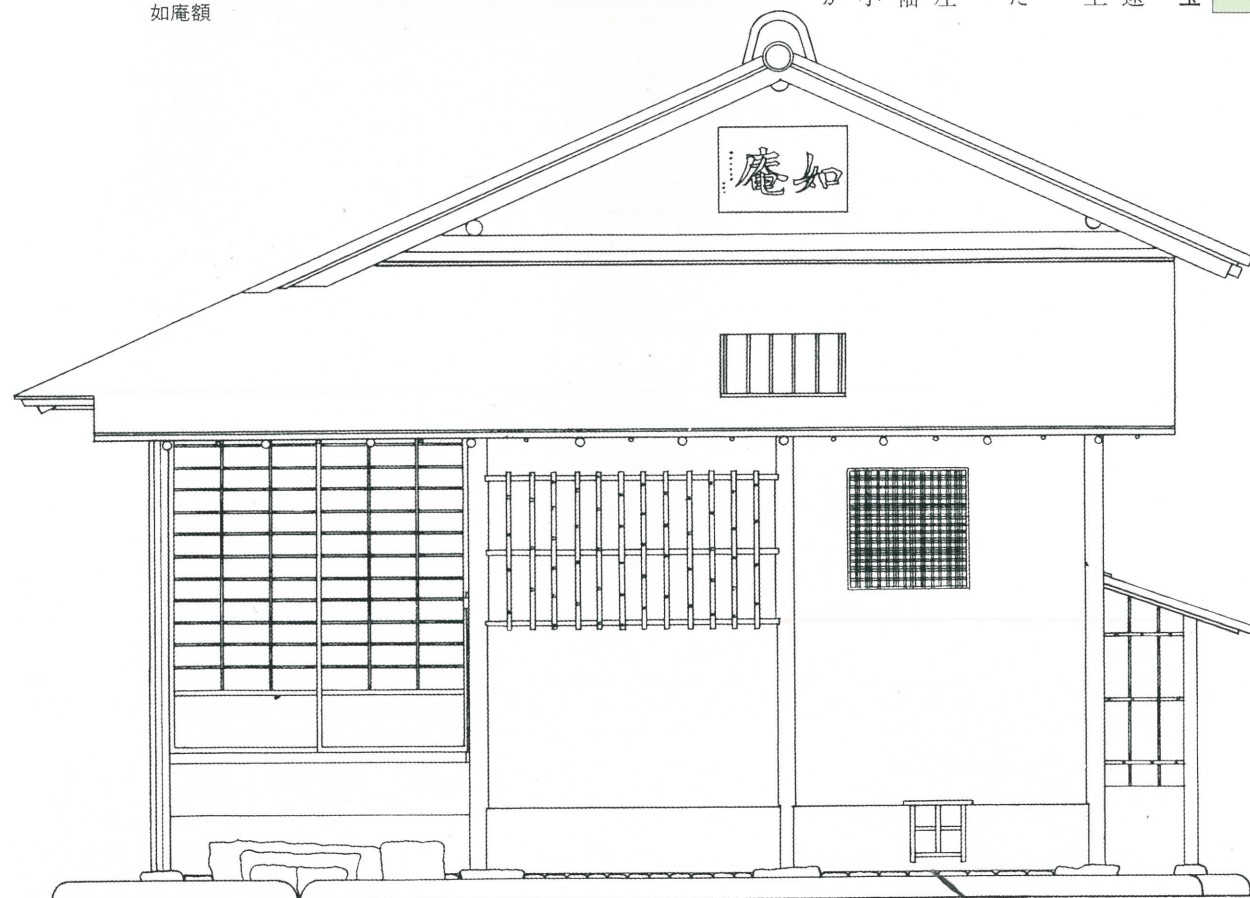
外観は利休風の草庵茶室とは少し異なり、どこことなく端正な姿を構成している。左端に凹形の下地窓を切った袖壁を付けて土間庇をつくり、開口は正面に見せずこの袖壁に向かってあげられている。また釣棚式の刀掛けがなく、そのかわり土間正面に小室を設けた。昔は「扈從の間」ともよばれたことがあったように、ここに置刀掛けが備えられたのである。



如庵額



如庵額



如庵立面図(正面)

茶室の内部は一畳半台目、炉は向切りである。「筋違いの囲い」といわれているように、床脇に鱗板（三角の板）を入れて壁面を斜行させ、茶道口から客座へ給仕をしやすくし、茶道口一つで給仕口が兼ねられるよう工夫が凝らされている。炉の前かどに中柱を立てて板を嵌め、そこに火灯形を割り抜いて点前座に明かりを導入している。この風炉先の組み立てが、点前座と客座を自然に溶け合せている。

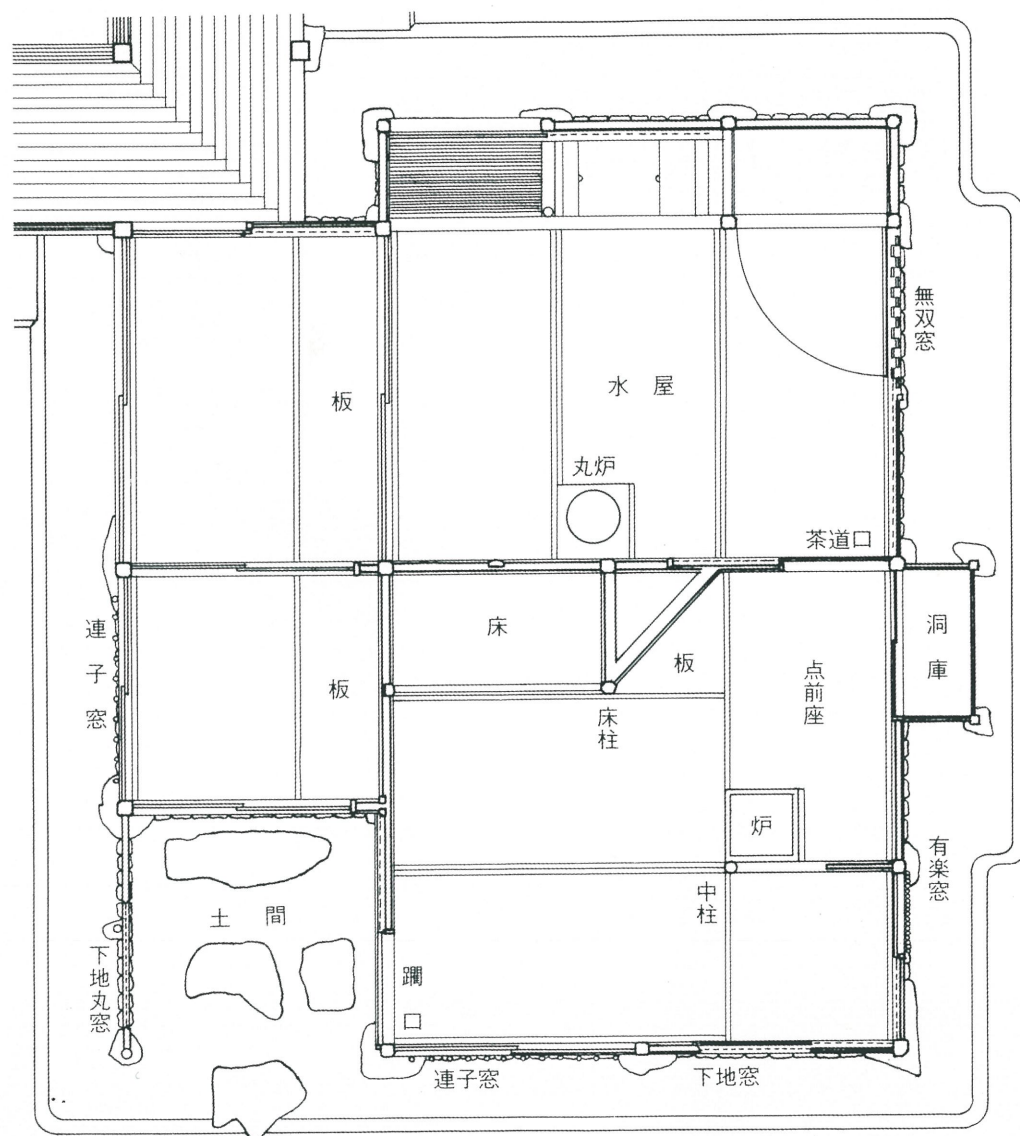
また腰張に古曆を使って壁面に意匠を添えている。「曆張りの席」とも呼ばれたゆえである。秀吉の大坂城内の山里の席にも試みられていた。現在ここに張られている曆は寛永年間のものが最古である。

点前座側の二つの窓は外側から竹が詰め打ちになっている。これも他には見られない手法で「有楽窓」と呼ばれる。詰め打ちでも節間から光がさし風がかよう。障子に映る陰影の効果も意図されたに違いない。

床柱は一面に鉦目を付した杣なぐりの材で気迫を秘めている。野趣に富む床柱に対し黒塗りの框を取り合わせているところは武家風の好みである。

このように如庵は、随所に先例をみない独創的な工夫が展開され、使い勝手において、また意匠において実に斬新で、有楽にとっても会心の作であったろう。

後年、尾形光琳もこの席の写しを造っている。それが現存する御室の仁和寺の遼廓亭で、江戸時代を通じて如庵は名席としてあまねく世に知られていた。



如庵平面図



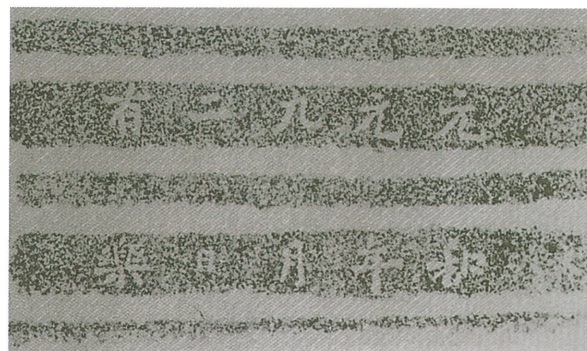
如庵の露地は、「都林泉名勝図会」に描かれている景を再現したものである。
茶室の前には「蹲踞」が組まれており、この水鉢は加藤清正が文禄の役（一五九二―一五九三）の際、釜山沖から持ち帰ったもので「釜山海」の銘をもっている。波に洗われて自然に出来た水穴の石を利用したもので、他に類をみない。前石は巨大で、これには天正七年の刻銘がある。
また、露地の隅にある石の井筒には「元和元年九月二日有楽」の銘がある。この井筒は、有楽がかつて修繕したことのある村田珠光（一四三二―一五〇二）の「佐女牛井」と同じ形をしているところから、これもまた「佐女牛井」の名でよばれている。



如庵露地



有楽好み井筒(佐女牛井)



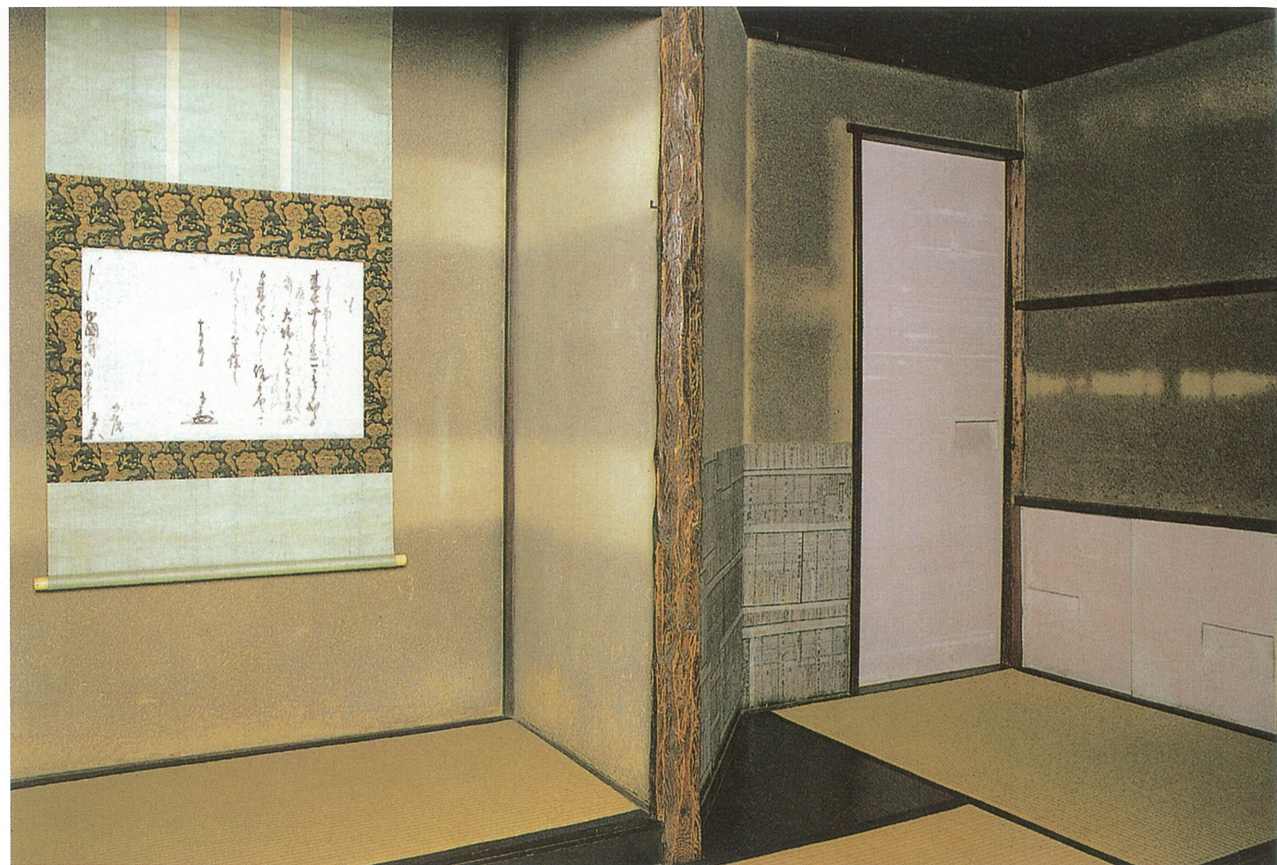
銘<元和元年九月二日有楽>拓本



銘<釜山海>拓本



釜山海



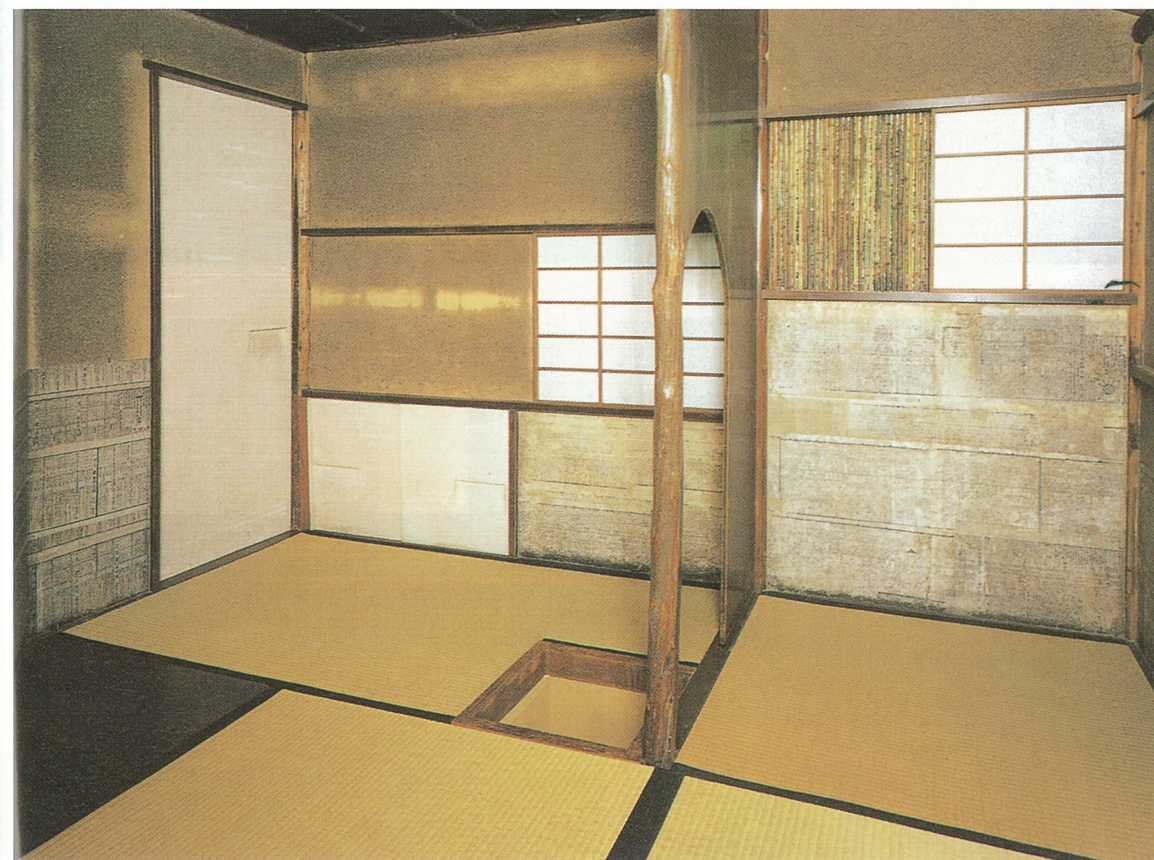
如庵内部



如庵内部



如庵 土間底と蹴口



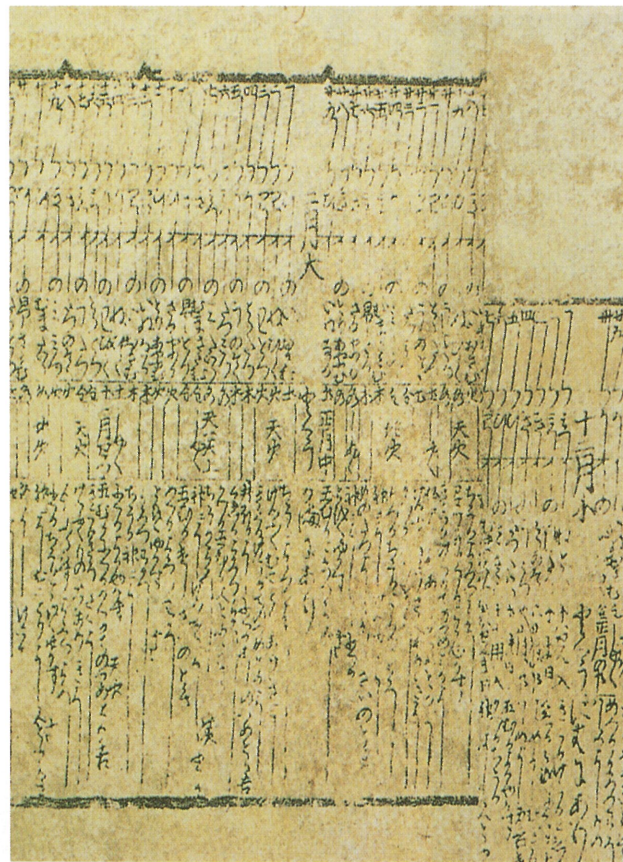
如庵内部



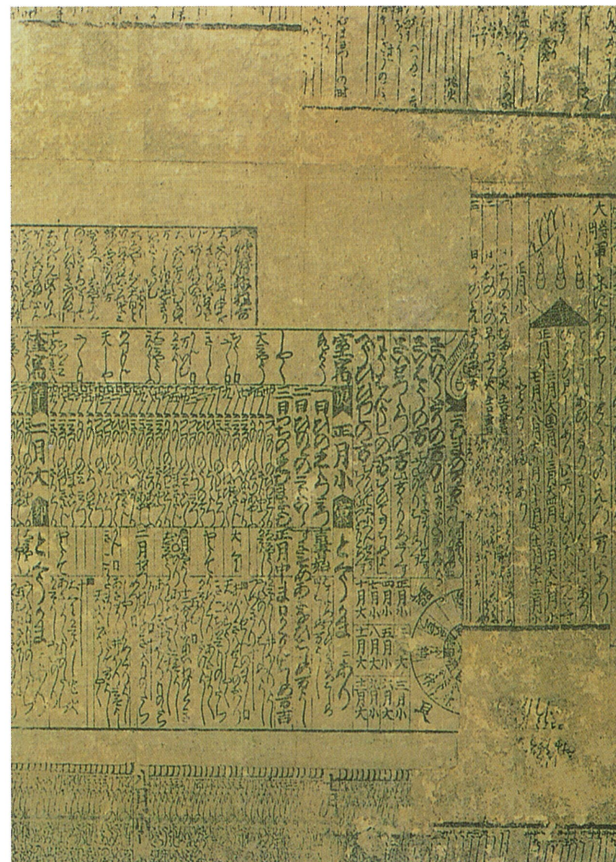
如庵 袖壁下地丸窓



如庵水屋



如庵 腰張り暦 部分



如庵 有楽窓



如庵 有楽窓